

達者へのご褒美

村上 豊（橄欖主要同人）

朝日新聞「いわせてもらお」

達者の鑑 1

「まだ早すぎる。生気をを吸い取られるので私より若い人がいる会がいい」と母は今年も老人会入会のお誘いをキッパリ断っていた。

超々高齢者は気構えが違う、と夫と苦笑。独居、家事自立、自足歩行の102歳。何者？（いっそ介護してもらおうかしら……77歳）

達人の鑑 2

病院の帰り、駅前からバスに乗った。発車間際に乗ってきた方が、いきなり優先席の私を指して「あんた立ちなさい、私七十よ」と怒った。

「すみません」と立った私。九十だけど。（団塊世代はお疲れなのね90歳）

鑑2の人は若く見られたのが嬉しかったのじゃないかな。七十代は怖いもの無しかナ。

鑑1の人は若い人達の生気は活力の元だから高校生の部活の見学させてもらえばますます元気になるのでは。百二歳の元気。凄い。

われよりも先に新聞読みたがる九十三の母まだまだ惚^ほけず 山内 義雄

いく度もあの世とこの世を往き来して母は夕餉を完食したり 島村 久雄

同新聞歌壇から

この短歌作品の脇のコラムに「俳句甲子園後」を青木亮人氏が書いているが、俳句甲子

園があるのなら短歌甲子園もあるのではないか。さぞ若若しい作品が並んでいるのではな
かろうか。歌壇に戻って

合唱部にスカウトしたき野球部のテナーの掛け声夏空に飛ぶ 森 明子

のような詠草が並んでいるだろう。

ほんのりとシナモン匂う月の出て君を迎える紅茶の支度 森越 裕里

高一の娘と話すその後すぐに調べるティックトックを 野間 エミ

日本語、外来語どちらも崩して新しい言葉になる現代、お母さんもバカにされないよう
に勉強しなければ。高一とナマイキ盛りを相手にえらいかーさんだ。

夏の夜眠る幼子 涼^{りょう} 求め布団の海をグルグル泳ぐ 我孫子郁恵

言葉にはならないけれどしゃべってる歯の未だ生えぬ赤子の口は //

幼子を二人連れてく病院はかわるがわるに声掛けられる //

この詠者は三人の選者が別の作品を採っている。子育てと短歌創作と大変だ。いや短歌
創りが子育てを助けているか、短歌甲子園の選手でないかな。

慎ましく生きてると言えれば見れば分るたまにくる息子あっさりと言いぬ 岡村 愛子

永田和宏氏評 岡村さん、あっさりの妙。

玉三郎の 花魁^{おいらん} 道中の 目映^{まぼゆ} さよ 女^{をみな} と生まれ傍観者なり 波多野浩子

高野公彦氏評 歌舞伎で坂東玉三郎の花魁道中を見て、その美しさに陶然、
というより呆然。

負けるな一茶ここにあり、で女性たちも頑張っしてほしいところ。

涼しい作品を読もう。

淵の辺にニッコウキスゲは霧の中音させて木道を鹿の来る 青垣 進

古代蓮咲けばひらひら湧き出でてちょうとんぼ蝶蜻蛉とふ蜻蛉の飛べり 内野 修

そして

卓上に焼きなすそうめん鮎あれば冷酒は青きグラスで酌まむ 森 明子